郷土研究資料（其の3）

美方町射添の自然環境と文化

（5万分1地形図「村岡」「香住」参照）

上治寅次郎

Ⅰ 緒言

射添は美方町の北半部で小代と併合以前は射添村と呼んだ。矢田川の中流を占め、小代川、湯舟川其他の上流支流を合せたる矢田川本流の谷底浸蝕は甚しく進行し、谷の両岸は峻しき峡谷（射添峡）を作り、概して広い耕地は少くない。山地も浸蝕輪廻の進行のため緩傾斜地は乏しいが、山上に近き僅小の土地でも開墾して集落を作るなど、自然環境が人文に影響していることを感ぜしめる。射添峡は**矢田川七里峡**の主要部をなす。

Ⅱ 自然環境

地形 一帯の山地は500—600米の標高を示し中国高原の隆起準平原面と一致するが、村岡、小代等矢田川上流地方に比して、浸蝕の進行著しきために平坦面は残つていない。三川山は標高887米、城崎郡境に聳え最高の名山をなす。

春来嶺の高原と相岡高原とは温泉町との境界をなし、玄武岩熔岩によつて被覆されたる処もあるが広大なる原野で、周辺より谷頭浸蝕を受けつつある。射添の川会より湯村行自動車に乗れば、つづら折りの阪路を春来嶺の台地に登り、高原を走つて、再び屈曲した道を湯村に急下する。この台地は射添区域の唯一の高原性地形である。和佐父の台地は矢田川の溪谷で春来台地と截られているが、旧時は互に連続した地形であつて準平原面の一部であることには疑いはない。

矢田川峡谷には両岸に大小の支谷が発達し、谷巾は狭きも山深く入り込むもの多きことは一特色であつて、浸蝕がよく進行して所謂壮年地形を示すのである。能波川支流は長さ7キロ、緩傾斜を以て流下して小代川に合流、和佐父川支流4キロ、長須川4キロ、味取川5キロ、山田川7キロ等両岸より矢田川本流に注ぐ。

平地は河岸に僅な河谷平野を発達せしむる外、著しき平野は殆どなく、小代川と湯舟川との合流に稍々大なる平地を作り、この平地は古代より現在まで、政治、経済、交通其他射添の中心地をなしている。

Ⅲ 集落と文化

1 自然通路 射添南部に村岡町方面より温泉町方面に通ずる国道がある。この通路は古代には長板、能波、担岡を経由して温泉町方面に通した如くである。其他は矢田川に添い香住方面と村岡、小代方面に通ずる道路が今はよく利用されるに至つた。これは山陰本線の開通以来のことで、古代は矢田川に添う通路は利用が少かつた。古代は味取から浜坂方面、春来方面に通ずる溪谷も利用されたらしく、小城越通路は西気文化との交流に利用されたと見られるも、何れも不便な間道に過ぎない。

2 集落の垂直的分布 小城部落は最高集落で550米、村岡町大笹の560米に似る。最低は境50米である。分布上の特色は200米以下の集落が大部分を占め古く発達した集落もこの範囲にあり、200米より300米の間には集落はなく、300米より550米の間の集落は何れも分離村、支村である。例外は相岡のみ460米の高所に発達するが、これは500米台地上にあり、往昔の交通集落で小代、村岡に多き高原集落である。

標高(米)	集落
500—550	小城
400—450	相岡※ 宮上
350—400	丸味
300—350	和佐父 宮谷
250—300	—
200—250	—
150—200	長板※ 能波 川会※ 和田※ 入江※
100—150	山田 高津 長須
50—100	味取※ 原 長瀬 境

※ 発祥古い集落

尚射添は全般的に小代、村岡、兎塚より土地低くく200米以下の地は殆ど平地である。200米—300米の範囲は多くは断崖、急斜面で部落は出来得ない。300米以上は稍緩傾斜地が多く、低地に耕地乏しき関係上、山の上に移動したものと解せられ、自然と人文の緊密な関係を知るに足る。

3 集落の特色 古代集落は南部と北部とは相当文化程度に差違があつたと見られる。羽柴秀吉が但馬に討ち入つた際（天正8年）香住より長須附近に遡り来りしに「射添強盗」集り来つて、箒（断崖のこと）の細道に導き秀吉を殺さんとした、など伝えられて居る。

それ等の中には（於丹）という女強盗も混つていた。これは北部射添の話で、南部入江和田等には市場集落として駅伝の馬、旅舎など宿場を形成していて、文化の遺跡と記録が残つているのと較べて、南北の文化の差異を窺うに足る。この差は自然環境によるのである。

入江、和田は交通上の要地に発達し、駅伝交通の時代には駅馬8匹あり、熊次（駒継）より黒野（村岡の旧名）を経て入江（射添駅）で馬を乗り替え、竹田面治駅に行くこととなつていた。今は**川会**が自動車駅となり。入江、和田の昔に繁は見られない。**和佐父**は入江の支村である。永正中に発祥した新集落である。

長楽寺は川会山にあり、天平元年（1,232年前）行基の創建、延暦中（1,170年前）僧空海も来つたと伝え、由緒は古く、真言宗の巨刹である。火災、山崩などで寺宝失はれたるは惜しきことである。

高津、長須は小部落で、高津の下流、矢田川左岸に断崖の岩壁があつて老松茂り、奇勝をなす。於丹の手掛松という。季吉が長瀬で捕えた女強盗をここ迄伴いしに、於丹は隙を見てこの崖を攀ぢて逃れ去つたと伝える

味取は射添の中央で、春来峠、浜坂方面への間道もあり、交通上の一要衝であつたらしく、式内伊曾布神社貞観2年創始（1,096年前）保食神を祀る。農業の神である。

原、長瀬、境等は河岸の小平野の開拓と山林とを目的としたるる小農村である。山間の**山田**は山名時代金銀鉱山町として繁昌した。今も町名、宅地址等に昔の名残を止める。小城は支村である。

長板は農村で**熊波**は長板より熊波川を遡つた奥にあり、往昔は春来峠を通行し得ず、駅馬はこの道を経由した。熊波は駒並の謂である。ここ迄は平地だが、これより柤岡に登るには急坂となるので馬を休ませ、人も休憩したものと見られる。

柤岡は高原上の大部落、徳川時代に於て射添北部のが僅々数戸の寒村に過ぎなかつた頃でも、柤岡には50余戸あり、今より40年前でも130戸位あつたという。発祥は鮮かでないが800年前には京都の蓮華王院領であつた。山名藩時代には柤岡城があり、今古城山に城址が残る。元は二方郡に属していたが、明治22年の頃射添村に編入された。寛永年間に春来峠の道が出来る迄は和田—熊波—柤岡の通路は二方郡への重要通路であつた。従つて羽柴秀吉もこの道を通過したので、現今も大閤清水などが残る。元巨刹萬福寺（高野山末寺）があつたが、羽柴討入り、小代一揆のとき各地の寺院と共に兵火に遇つた。

柤岡は往昔交通上の一宿場として発達したが、時代の推移と共に昔の盛を取り戻すことは出来ぬようになつた。集落の興廃、興亡も自然と環境の支配を受けることの偉大なるを知る。人は之を克服して行く努力と才能を持つことが望ましいが、果してどこまで可能であろうか。

柤岡は古く檀岡と書く、急に一段高くなつた台地の上にある意である。

筆者は史家ではない。自然科学者で地学を専攻する一学徒である。古今を通じて自然環境が人類活動を支配することの多きを思い、矢田川上流を材料として記述したのである。史学専門の立場に於ては独断的見解もあろうと思うが、本文が郷土研究の一資料ともならば幸である。（昭和32年6月稿）